

おもてなし
根ではありますまい。これですべては旨なし。

おもてなし

サービス、おもてなし、布施。しかし、これに、ともすればいつも纏い付く卑しい心根ではありますまい。根ではありますまい。これですべては台なし！

お念仏は　法語カレンダー九月
(H.P.より一部抜粋)

讃嘆であり懺悔である

すん

な季節でした。次男入海の高校の
クラスバーべキーに始まり、長

おもてなしということは、仏教では古く

「印度から、「布施（ダーナ）」という德田で伝統的に強調されてきました。例えば、「悟り」に到達するため、最低限、経なければならぬ六つの実践項目（六度・六バラミター）（布施フセ・持戒ジイ・忍辱ニニカ・精進シカ・禪定センジウ・智慧チエ）。その第一番目が「布施」です。

お寺さんへ差し出す謝礼金のようと思われが

ちですが、仏教では古くからずっと幅広く、布施には（1）法施（檀主の欲を説いて心に）2財施（ものを施して心に）3無財施（昌にみだいサーク）4無畏施（恐怖を除く）などがいわれてきました。また特に紀元前後に興った「大乗仏教」（僧侶も俗人も、すべての人々を対象にした仏教）では、おもてなし、布施を非常に幅広く、四攝法（シヨウガフ）といって次の四つに分類しています。

し)
1、布施法（心や物でのおもてなし）
2、愛語法（やさしいことばのおもてな
3、利行法（からだ・言葉・心のうでの
サービス）
4、同事法（相手と同じ立場に立つての
サービス）
日本の道元禅師さまも著書のなかで強調さ
れています。

最後に、これらの「おもてなし」「サービ
ス」「布施」行為にあたつて自戒・警戒しな
ければならない大事なことがあります。
それは「三輪清浄」（さんりんじょうじょ
う）といわれていることです。

それは、1能施 2所施 3施物の三点に
ついて執着（こだわり）（名利心）があつて
はならないということです。

「わたし가」一あの人に—これこれのも
の(こと)をして上げた(どうだ偉いでし
」。



パシャリ！子ども会のひとこま 紙芝居「こふとりじいさん」に見入る子どもたち

「台なし」だけではなく、「これが卑しい」「煩惱」に転落してしまうのです。

蓮如上人という方はこのこころをズバリ。「ウリゴコロ」（自己宣伝のこころ）といい、「まいらせこころ」（してあげたこころ）と指摘し、このこころの最後には「なになにをしてやつたノニ」と、おもてなしサービスどころか、相手を憎悪し排斥する「貪慾・瞋恚・愚痴」三毒の煩惱。地獄に自ら墮としていく結果を招くのは、世の中によくあることではありますから。

人ごとでなくわたし自身、自省しなければなりません。

あの人に、わたしは、これだけのサービスをして上げたノニ、（なんのお礼のことばもない！）。非難し罵倒し憎悪する。これではほんとうの「布施」とはいえないどころか、地獄……畜生・餓鬼の仕業ではありませんか。

人ごとでなく、自省したいものです。

教えに遇うとはどういうことなのか。どのように時に、その「はたらき」を感じるのか。そんなことを最近、特に考えるようになりました。(中略)そしてこの法語の出典である「金子大榮対話集」を改めて読む」とから「人として生まれた悲しみを知ること」という確かめを得ることができたと、うに思います。(中略)仏法を受け入れる心の字には、人が普段気づかないほど奥深いところに潜む心があるということでしょうか。毎日何気なく生活をしながら、あと多くのものに支えられ生がされている」とを思います。そのことは昔から教えられてきたことがあります。身の回りの身上の上にいつ何が起きるかわからないところ生きている」ととも、実はその「悲しい心」が起つたときに気づかされることです。対話集の中『時代を悲しみ、人間を悲しむ。その悲しみのが悲です。思想的に言えば、「氷おおきに氷お

女希里の女子大生出石・城崎の旅、
姉の孫たち、勝林寺の子ども会、
地域の地蔵盆・・その数のべ一五〇人！下は一歳
から、上は一九歳まで！「近頃の子どもたちは、
よいかいさつしない、携帯ばかりさわって・・」と大
人たちは嘆きますが、私が出逢った子どもたちは
みんな、かいさつもよくできるし、素直で、かわ
いくて、よく気がつき、お行儀もけつして悪くは
ありませんでしたよ。そればかりではありません、
その子どもたちの多くが、大人に教えられながら
だつたり、あるいは自主的にだつたりと理由は
様々ですが、本堂や向拝で、手を合わせてお礼を
しています。その姿は、ほほえましいだけでなく、
心から「尊く美しい」と感じるものでした。

「手を合わせる」ことには、いろいろな意味が
あるようです。とりわけ、仏教では、右手が自分
なら左手は仏さま、仏さまと自分が一つになる、

うことを意味します。仏さまにすべてをお任せします
ということです。食事をする時にも手を合わせま
す。自分の命と食物の命が一つになります。お墓
の前でも手を合わせます。先祖と自分が一つにな
ります。そう考えると、私が「生きる」という、
とは、この世に生きるすべてのものと自分が一
になるということだと気がつきます。それは、家
族であつたり、友だちであつたり、ひいては、草
や木などの植物や動物、太陽や星さえも自分と一
つになるということです。どのひとつが欠けても
自分の命はないのです。そこには、おのずと「感
謝」の気持ちが湧いてきます。「おかげさま」「あ
りがとう」—手を合わせる姿を見ていると、その
心もちが伝わってくるから「尊い」「美しい」と
感じるのでしょうかね。

黄、おばあちゃんは、いろいろなものに向かつて手を合わせていました。私もそんな姿の似合うおばあちゃんになりたいな（笑）（文責 坊守）